

「教師は何の専門職なのか」 松本美奈

長時間労働や、それに見合わない給与などが問題視され、学校はブラック職場と言われています。その結果、自治体の教員採用試験の倍率は低迷しています。

これに対して、国が打ち出したのが、教師の仕事の「3分類」厳格化です。「学校以外が担うべき業務」「学校の業務だが必ずしも教師が担う必要がない業務」「教師の業務だが負担軽減が可能な業務」に分け、教師の負担を減らそう、という構想です。

この政策には三つの問題があります。まず、教師の手を離れた仕事は、誰が、何が担うのか。学校現場で働く外部人材は毎年増え続け、2023年度は7万4000人でした。187億円の予算が投じられています。財務省は、AIによる合理化を求めています。

AIによる合理化と並行して「ロボット教師待望」論が出されています。子どもの学習データを正確に記録できて、しかも24時間365日働けるロボットならば、より良い教育ができる、と期待しているようです。

第2の問題点です。3分類厳格化は「教師だけが担える仕事とは何か」という問いを突きつけてきます。教師は何の専門職なのか、ということです。それは時代によって変わるものでしょうか。2022年1月、国は「教育データの利活用ロードマップ」で、「教師は学びのデザイナー、コーディネーター」と書いています。AIを駆使したデータの利活用が前提です。さらに、その担い手は人間かロボットなのか、という問題も出てくるでしょう。

最後に、3分類を含めた一連の政策は合意されているのか。教師自身や子どもたちが納得していなければ、政策は「絵に描いた餅」に過ぎません。

今日は、中央教育審議会元会長の安西祐一郎先生、現在も中教審委員として政策づくりに携わっている堀田龍也先生をお招きし、お話を伺います。後半のワークショップでは、参加者の皆さんと一緒に、この三つの問いを考えていきます。

